

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第474号 2021年9月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

「子どものために 子どもと作る」

石原 佳奈

2020年4月。担任する子どもたちは、突然の臨時休業中に5年生から6年生へと進級した。最
 高学年への切り替わりでもあり、
 友達とのかかわりも制限された約
 3か月の影響は大きく、登校再開
 時、慣れ親しんだはずの学校生活
 に不安を抱いている子が多かつ
 た。実際に学校生活にも多くの制
 限がなされ、人との触れ合いはな
 くなつた。そんななかで、自分を
 表現し、他とかわることができ
 るのが授業だったように思う。物
 理的な距離や活動の制限があつて
 も、考えの共有はできるからだ。
 そのころ、学校として「国語」
 の研究を行っていた。試行錯誤し

てきた手だての一つに「構造的板書」がある。ICT機器が導入され、一人一台タブレット端末を持つ時代。考えの共有をする方法はさまざまであり、それぞれに利点がある。そのなかで黒板に教師が子どもの意見を書いていくよさは、話し合いの深まりがリアルタイムで視覚的に捉えられることにあると思う。今、話題の中心はどこか。だれがどんな意見を言ったのか。似ている部分と相対する部分ながら板書と向き合うことができる。

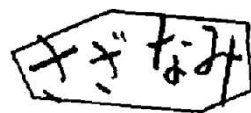
授業を参観してくださった吉永先生から、「先生の授業には発言の後に間がある。あの間に子ども

たちは何を考えているのか。」と尋ねられた。子どもたちにアンケートをとってみると、「自分の意見が黒板のどこに書かれるのかわっている」「次に何を言おうか考えている」「今の発言がどの言葉とつながるのか予想する」などの答えが返ってきた。私が予想していた以上に、子どもたちは教師が黒板を書く時間も課題と向き合っている。そして、教師が書く黒板をもとに考えを深めている。授業者として、その気づきが大きな学びであった。

感染症予防をしながらも、国語の授業を通して、思いを伝え合い、自分の考えを深めることで、子どもたちのかかわり合いは失われずに済んだ。年度当初に「思ったことをうまく伝えられません。どうしたらよいか困っています。」と日記に書いた子は、3月の国語のまとめには「学校へ行くと、みんなが自信を取り戻してくれる。」と書いた。学校の、集団での授業だからこそ伸ばせる子どもの力がある。

私は、今、中学校の「数学」教師である。教科の特色は違えども、目の前の子どもたちと授業を作ることに変わりはない。子どもたちのためになる授業作りを楽しもう。

(蒲郡市立塩津中学校)



▼授業(ワーク形態を除く講義)にはいくつかの方法がある。私の経験では次の三つが思い浮かぶ。一つ目は、パワーポイント等の機器を活用し学習内容を丁寧に伝える方法。二つ目、テキストの

大事なことについて詳しく説明をする方法。詳しくとは、学生の反応を見ながら、授業や子供の様子がわかるように具体的に補足する。三つ目は、テキストの範囲をもとに、大事なことを補足する。加えて、自分でまとめる時間を、講義内容のひとまとまりごとに設ける方法▼講義内容の新しいさとともに資料の豊富さをもとに深い内容を伝え、興味を持たせる上では一つ目、二つ目は手応えがある。講義に興味を持たせたり、内容を具体的な姿で理解するという意味においてである。しかし、指導内容が定着しているのは三つ目である。それは、意図的に「書く活動」を授業に設けているからである。書くことを目的にテキストを読み返す。講義の内容を整理するという活動の効果である▼授業で数回書くことについては、負担を感じている様子を見せる学生もいる。それは、書く文章の量と文章内容の語彙力に、高校までの学習力の蓄えが影響してくるからである▼「書くこと」は、学習力の基礎基本となる活動として、特に、小学校では、大事にしてほしいという気持ち強い

(吉永幸司)

夏をテーマに
俳句をつくらう

北川 雅士

1学期の終わりに、「夏」をテーマにした俳句を作り、句会を開く学習を行った。6年生1組では、4月から毎月月末に句会を開いている。テーマはその月ごとに見たこと、感じたこと、経験したことなど。句会の後には投票で優秀賞そして担任から特別賞を選んでいく。本年度はICTを活用した俳句作りや句会の進め方も考えていきたいと考えながら、進めている。今回は7月の句会。夏休み前なので、テーマを「夏」に設定した。週予定で、句会を開く日を設定し、その前日は登下校の道や家の周りで見つけたものをノートにメモをしてくるように課題を出している。風景や、友だちとの会話、家の周りの草花や、虫や取り、冷蔵庫の中や食卓に並ぶものなどをノートに書いた状態で学習に入る。あわせて教科書の「季節の言葉」にあわせて、その時期の代表的な季語をみんな確認しながら、句を作っている。今回は7月の夏休み前なので、家でメモしてきたものにも夏らしいものが多く並んだ。

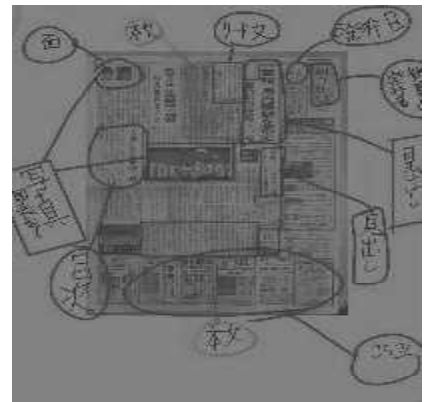
小グループで家で書いてきたノートのメモを読みあい、交流した。「昨日、かき氷食べたんだよ」「朝ひまわりが咲きかけてた」「〇〇くんが夏休みバーベキュー行くって言った」「育ててるカブトムシが大きくなった」「エアコン派か扇風機派か」この時間が一番盛り上がる。それぞれが自分の見つけた「夏」をテーマに盛り上がった。その後、席を戻して、俳句を作る。できた俳句は短冊に清書するだけでなく、オクリンクという情報共有ソフトを使用して、データを全員提出し、そのデータですぐに句会を開いた。6月からこの方法で句会を開くようにしているのでこれが2回目であったが、それぞれが個人がタブレット上で全員の俳句をすぐに共有できるところはとても便利だと感じている。全員で俳句を読みあつた後、オクリンクで投票する俳句の番号を記入したカードを担任に送信し、7月の最優秀賞を決めた。1位の句は「炎天下 向日葵の花 太陽へ」に決まった。子どもたちからは「文字だけで暑そう」「自分の家も向日葵が咲いていた」「風景が思い浮かぶ」などの感想があった。ちなみに北川先生特別賞は「カブトムシ 木の幹土俵 相撲とり」を選んだ。この句をよんだ子は、ふだんから意欲的に国語に取り組むタイプではないのだが、ここにこしながらかブトムシの話をしてるのが印象的だった。今年度、6年生1組の句会のためには「自分らしさが表現できる句」を作ることになっている。毎月の俳句作りを楽しみつつ、文字で表現する楽しさを感じてくれるとうれしいと思う。

(彦根市立城南小学校)

新聞を読もう
西條 陽之

「新聞を読もう(光村図書5年)」は、新聞の作りを確かめ、同じ内容二つの記事を比べることで記事の内容が異なることを学ぶ単元である。ネットニュース等で情報が入る家庭も減少しており、子どもたちが新聞を読む機会も減っている。5年生は新聞以外の情報メディアについても社会科で学ぶ。情報にみられた生活の中で、動的、多角的、批判的に情報とうまく付き合える子どもたちになつてほしい。

新聞の二面から作りを確かめる活動では、教科書で見出しやリード文などを確認した後、タブレット端末に取り込んだ紙面を共有し、各名称を書き込んだ。困み線や矢印、色などを工夫して新聞の作りを再確認した。友達が書き込んだページを閲覧して、自分のページと比較することで安心して作業ができたようである。(写真①)



(写真①) 書き込んだ内容を共有

タブレット上で共有できることは素晴らしいことであったが、やはり本物の新聞に触れて、読んでほしいという思いがあった。そこで、近くの新聞販売所をお願いをして、その日の朝刊を人数分提供していただいた。新聞をめくるところから苦戦している様子。机では広げきれず、「床で読んでもいいですか。」と何人も聞いてくれたので、「ご自由に」と伝え、気になる記事を探す時間をたっぷり取った。「新聞の方が正確に詳しく書いてある。」「ニュースで耳にして気になっていたことが全部書いてあった。」「タブレットの画面上だけでは気づけない、本物で学ぶ価値が、彼らの真っ黒になった指先に表れているような気がした。

(大津市立小野小学校)

すべての子どもたちの学びの保障
〜1人1台端末環境の可能性

池崎 繁伸

2学期当初、午後2時過ぎ、子どもたちのいない教室の大型液晶画面に、次々と1年生の子どもたちの笑顔が映し出されていく。その顔にマスクはない。お気に入りポケモンのぬいぐるみを抱いている子。両手に持った大きなクワガタをカメラに近づけてくる子。学校とは少し違った姿が垣間見られる。担任がマイクをミュートにするように促すと、どの子も慣れた手つきで操作していく。ただ、いつの間にかミュートを解除してしゃべりだす子が何人かいるのも1年生らしい姿である。自分の話を担任に聞いてほしくて仕方ない様子。

本校では、夏季休業期間中に全校児童が学習者用端末を持ち帰り、タブレットドリル等の課題に取り組んだ。さらに、2学期当初には、特別支援学級を含む全学級でMicrosoft Teamsによる学校と家庭をつなぐオンライン接続を実施した。冒頭に記したのは、オンライン接続初日の1年生の子どもたちの様子である。2日間のオンライン接続の実施内容としては、次のとおりであった。
・児童一人一人との会話、健康確認

・チャットによる会話・問題出題、出席確認
・宿題を一緒に行う、解説する
・既習学習の復習
・ワード、パワーポイント等の画面共有による学習 等
普段教室に入りたく別室等で過ごしている子どもが、オンライン接続には参加でき、担任等と会話することができたケースもあった。

この学校と家庭をつなぐオンライン接続の実施に向け、2学期当初の短期間で、できる限り子ども一人だけで学習者用端末やMicrosoft Teams等が操作できるように、各学年に応じた操作マニュアルを作成したり、接続練習を繰り返したりしてきた。その結果、後日個別に接続を行ったケースを含めて、予定していた学級すべてで接続を確認することができた。ただし、低学年等を中心に、画面には映し出されてはいなかったが、家族や放課後児童クラブ等の様々な協力があってこそ成立した取組であった。

このオンライン接続は、市内小中学校共通の取組である。文部科学省では「児童生徒の心身に与える影響が大きい」として全国一斉の休校は行わないとしているが、今後の臨時休校、学級閉鎖等、主にコロナ禍でやむを得ず登校できない子どもたちの学習保障のため、オンライン授業を見据えて、今回のオンライン接続を実施した。

新型コロナウイルスの第5波以降、十歳代以下の感染者の割合が増加している。現在、学校現場では、感染拡大を抑えながらも目の前の子どもたちの学びの充実を図るといふ、「感染防止」と「教育活動の充実」の両立に向け、日々様々な面で試行錯誤を重ねている。特に、授業改善の取組については、子どもたちの学習活動やその形態、教師の授業研究会の持ち方等についても、感染防止の観点から制限をかけざるを得ない状況である。

本校では、「学びに向かう力」が弱く学ぶことの意義やおもしろさを感じることが難しい子どもが、仲間とともに学び合い輝いていける学習の在り方を模索し続けてきた。学習集団としての繋がりを深め、一人一人の子どもの「学びに向かう力」をより高めていくことが重要だと考える。

このような状況の中、授業改善の新たな切り口として、1人1台端末環境の活用の工夫を促していきたい。これまでの研究の成果を生かしつつ、ICT環境の活用によって探求と学び合いの授業改善をより一層促進することができると考える。そのためには、子どもたち一人一人がICT機器を文房具のように扱える学習者中心の活用の在り方を探求していく必要があるであろう。

学校は、すべての子どもが安心して過ごすことができ、誰一人取り残すことなく学びを保障できるように挑み続けていかなければならない。

(彦根市立河瀬小学校)

編集後記

八月例会(四百七十二回)は、基本提案

及び感想の交流をメールで行うという方法で開催しました。提案は蜂屋正雄さん(北野小)提案教材は「ランドセルは海を越えて」(光村4年) 研究主題は「ICTを活用した、国語学習の取り組み」▼実践内容はロイノートを活用した3事例で、①読書単元「ランドセルは海を越えて」(ビブリオバトル) ②俳句の句会 ③「新聞を作る」(アンケート調査)でした。提案は主として①について実践。読書指導で積み上げてきた3色ボールペンを使って読み自分の思いを蓄え表現することでした。ビブリオバトルへ広げることを意図して提案。特に3色ボールペン使った読みの成果として「児童は線を引き、また、友だちが引いた線を見ながら、青線や赤線は似ているところが多いことを確かめるところに、赤線でも人によって違うところ、また、面白いと感じるところはそれぞれであることを知った。ここでは、教科書をタブレットで写真に撮り、全員の線の色がそれぞれであること、少し似ているところもあることが視覚的にも確認することができた」とICTを活用との関連についてまとめていきました▼意見交換では「ICTの有効活用という点から考えると、初発の感想や線を引いた箇所の感想はロイノートの付箋に書かせて交流する」という方法という提案等、深め合う研究会になりました。▼巻頭には、石原佳奈先生より、玉稿を頂きました。深謝。

(吉永幸司)